

第三話 機長 浅見元規



ハチ公が渋谷駅に帰って来たのは、主人を待ち続けた月日は10年。人々の脚を打ったあのひたむきな姿勢は、ハチ公にとっての当たり前でした。
スターフライヤーは、お客さま満足度10年連続ナンバー1。北九州の小さなエアライン・スターフライヤー流の「ハチ公スピリット」をご紹介します。

熱視線。 コックピットからの

硬い表情のビジネスマンや、楽しそうな家族連れ、元氣そうに走って列を追い越していく男の子。ボーディングブリッジを渡るお客さまは毎便様々だ。搭乗者へ今日も熱い視線を向けるのはパイロット浅見元規。人が好き、人を想う仕事が好きだという彼は、離陸前の多忙な準備に万全を期しながら、寸暇を惜まず「お客さま観察」を行う。コックピットの窓から一直線、鋭い観察眼でじっくり一人ひとりの表情を見つめて、気持ちや状況を推察し便ごとに、どんなフライトが最善か考える。

飛行機乗りを目指した祖父の夢を引き継いで、幼い頃からの憧れ、A320に乗る。スターフライヤー最年少の機長となった浅見。「空を飛ぶのは楽しくて仕方ない。重圧と戦う苦難もあるが人間にしかできない操縦を突き詰めたい」。彼の持ち味は、人の気持ちを考えたフライト。例えば料理人の腕によって同じ素材でも味が異なるように浅見が操縦する飛行機は、便ごとに違う。お疲れのお客さまが多い日には機内アナウンスを制限したり、気流が激しい中で揺れに怯える子供がいたら、燃料効率が悪くても風の弱いところを狙って効率よく飛ぶ。管制官とのやりとりや磨いた技術でいかに納得できる味を出すかは腕のみせどころだ。着陸後、自分のフライトはどうだったのか。飛行機を降りるお客さまへ再び視線を向ける。直接コミュニケーションできなくても、この観察時間を必ず割いて心を動かし考え、準備と反省を何度も繰り返す。それがパイロット浅見の「ハチ公スピリット」だ。

彼がスターフライヤーを選んだのは、人と人との関わりを大事にするエアラインだと思ったから。「1日に何便ものフライトを重ねる時もあるが、僕らは毎便その日その時のお客さまに伝えられるよう自分の目で確かめてひたすら動くんです」。それはどこか、ハチ公が雨の日も風の日も雪の日も、毎日渋谷駅に通い続けた10年の積み重ねに似ている。着陸後のボーディングブリッジで、男の子がスキップしながら到着ゲートへ向かっている。目的地に着いたお客さまの姿へ視線を送りながら、離陸前よりも晴れやかな気持ちで、次の便に向けて動き出す。今日もスターフライヤーのハチ公物語が始まる。

空飛ぶハチ公 スターフライヤー

